

渦中の 農力

度重なる異常気象や未知のウイルスの流行など、波乱な情勢となった2020年。過酷な事態のなかで、生産者は何を思い、何を行ったのか……2020年の栽培過程を振り返りながら、渦中から未来を見据える生産現場のすがたに迫ります。(4号連載/第4回)



枝豆

農事組合法人

平沢ファーム



のうじくみあいほうじん・ひらさわふぁーむ
秋田市雄和の平沢、石田、妙法、水沢
地区で、枝豆9ヘクタールと水稲、大豆
ネギ、ダリア総計93・7ヘクタールを手
掛ける。平成26年に設立し、構成員戸
数は77戸に上る。齊藤又右衛門代表理
事(72)が代表者を務め、大豆・枝豆
部長は蔭山和孝監事(40)。

——今年度、新型コロナウイルスによる影響や、農作業に入るうえで感じたことはありましたか。

当法人ではJAの共選場を通して、スーパーなどの量販店を中心に出荷しています。家庭内消費がメインのため、コロナによる大きな影響はなかったように感じています。

私が法人に入ってから今年で4年目に当たります。「大豆・枝豆部長」という責任者としては1年目ですので、前任の方を踏襲しながら、まずは目の前のことを頑張っていこうと思いい、作業に励みました。

——すっきりしない天気が多く、枝豆の栽培には苦労したかと思えます。

当法人では枝豆を10品種育てているため、最初に作業が遅れてしまうと、その後のスケジュールに大きく影響してしまいます。悪天候が続き、圃場に入ってから作業がしづらい状態が続いたため、とても難儀しました。

春先の準備作業では、明渠作業がなかなか捗りませんでした。圃場の水が多く溜まっていると溝をうまく掘ることができないため、大変だったことを覚えています。極早生品種の播種のはきは寒かったためマルチシー